

ずいそう

私の「外遊」忘れ残り記

大脇 勉



「外遊」という言葉は、政治家が税金をつかい諸外国で行う政務の慣用語としてメディアで使われているようである。この使われ方について、私は疑問をもっている。

ところが私の「外遊」は、コソコソと蓄えたお金をおもしろ可笑しく無駄に使い、国賊とまらないギリギリのところ「恥のかき捨て」をしてくるもので本物の「外遊」である。

私は、これまでに9回で14ヶ国を旅行した。そして色んなことを見聞、体感し多くの思い出をつくった。ところが、記憶力に乏しい私は、その殆どを忘れてしまい、何故か、どうでも良くて、くだらない事のみが鮮やかに忘れ残っている。

■□□□コミュニケーション

私の「外遊」は、総て団体旅行である。その理由は私が内弁慶で語学の力が無く、「海外旅行同好会」などに紛れ込むことで、はじめて旅行の目的が達成できるからである。従って、私はチェックアウトが苦手な宿泊ホテルの個人的な支払いが無い様になっている。

それでも平成10年にデンマークを旅行した時、自宅へ電話する必要が生じ、翌朝のチェックアウトをシドコロモドロの自己流英語で、カウンターの美女に話し掛けたところ

『私は愛知県の大山出身です。どうぞ日本語でお話し下さい』

と丁重に対応され、自尊心が傷つけられた。やっぱり最低限の語学力は必要である。

□■□□トイレット

人には1日に大が1回、小が数回の生理現象がある。北歐では雲つくような大男が多いせいか、小の便器が異常に高かった。己の股下を考え子供用を使えば良いものを、つま先立ち、仰角30度で発射したが哀れであった。大が小を兼ねない場合もあるのである。

平成6年の中国旅行でのこと、洛陽で芍薬園を見学したのち、無料便所で用を足したが、溝が掘ってあるのみで驚いた。その洛陽から北京への移動は、なんと中国空軍機に変更された。軍事上の要請からか、3時間以上も待たされ、夜に北京の軍用飛行場に着いた。薄暗い飛行場の便所で友人と二人で小便の最中に、

『後ろを見ないで』

と囁かれた。「見ないで」と言われれば見たくなる。ソワッと覗くと、眼光の鋭い兵士がこちらを睨み大便をしていた。私は何ともいえない恐ろしさを体感すると同時に、やけに白い日本式便器の残像が臉に残った。私は、その残像から「便器の金隠し」の意味を実感として理解できたのである。

□□■□ナチュラル・ロケーション

北歐は船と汽車と自動車ですら巡ったが、印象的な二つの原風景を観た。

フィヨルドは高原が一気に海中に没している。高原と斜面には草木が少なく、雪解け水が一条の筋となっている。近づくと、その筋は真っ白な山羊が一行に並びゆっくりと歩んでいるようだ。更に近づいてみるとそれは「滝」で、真っ白な山羊が獰猛な白い野獣に変身し、先を争い、のたくり、飛び越え、突進している様に見える。自然のパワーに圧倒されたのである。

その昔、私は東山魁夷の絵画「白夜の光」に魅せられた。北歐に現存する湖と針葉樹林、空と太陽光のかもしれない感動を体感したのである。

□□□■カルチャー

私の「外遊」は、東洋とヨーロッパのみである。両者を比較してみると、物的文化は、東洋が「土」でヨーロッパは「石」と思えた。精神文化は東洋が「拝金」でヨーロッパは「信仰」に収斂しているように感じられた。

ベルギーの大聖堂を訪れた時、「ミサ」が行われていた。聖歌隊の奏でる荘厳な賛美歌を、私は初めて聴いた。無宗教の私にも敬虔な祈り心が芽生え、十字を切りたくなった。けれども、その仕方が分からない。友人の奥さんが、小声で教えてくれた。

『大脇サン、右手を左肩へ、次いで右肩へ、その手をお頭へ、そして真っ直ぐに下に胸まで』

私は、西欧的な神への敬虔な祈りが初めて出来たのである。